

車

宮沢賢治

ハーシユは籠かごを頭にのつけて午前中町かどに立っていましたが、どういうわけか一つも仕事がありませんでした。呆あきれて籠をおろして腰をかけ弁当をたべはじめましたら、一人の赤髯あかひげの男がせわしそうにやって来ました。

「おい、大急ぎだ。兵營の普請ふしんに足りなくなったからテレピン油ゆを工場から買って来くれ。そら、あすこにある車をひいてね、四岳しやくだけ、この名刺めいしを持って行くんだ」

「どこへ行くのです」ハーシユは弁当をしまつて立ちあがりながら訊ききました。

「そいつを今いまいうよ。いゝか。その橋を渡わたつて楊やなぎの並木なみきに出るだろう。十町じうちやうばかり行くと白い杭くいが右側みぎがはに立っている。そこから右に入るんだ。すると蕈きのこの形をした松林しょうりんがあるからね、そいつに入いって行いけばいいんだ。いや、路みちがひとり

でそこへ行くよ。林の裏側に工場がある。さあ、早く」

ハーシユは大きな名刺を受け取りました。赤髯の男はぐいぐいハーシユの手を引っぱって、一台のよぼよぼの車のとこまで連れて行きました。

「さあ、早く。今日中に塗っちまわなきゃいけないんだから」

ハーシユは車を引っぱりました。間もなくハーシユは楊並木の白い杭の立っている所まで来ました。

「おや、蕈の形の林だなんて。こんな蕈があるもんか。あの男は来たことがないんだな」ハーシユはそっちの方へ道をまがりながら、貰^{もち}って来た大きな名刺を見ました。

「土木建築設計工作等請負 ニジニ・ハラウ、ふん、テレピン油の工場だなんて見るのは、はじめてだぞ」

ハーシユは車をひいて青い松林のすぐそばまで来ました。すがすがしい松脂^{まつやに}のにおいがして鳥もツンツン啼^なきました。道はやつと車を通るぐらい、おおばこが二列に道のなかに生え、何べんも日が照つたり蔭^{かげ}つたりして、その黄いろの道の土は明るくなつたり暗くなつたりしました。ふとハーシユは縮れ毛の可愛らしい子供が水色の水兵服を着て空気銃を持って、ばらの藪^{やぶ}のこつち側に立って、しげしげとハーシユの車をひいて来るのを見ているのに気が付きました。あんまりこつちを見ているのでハーシユはわらい

ました。

すると子供は少し機嫌^{きげん}の悪い顔をしていましたが、ハーシユがすぐそのそばまで行きましたら、俄^{にわ}かに子供が叫びました。

「僕、車へのせてってお呉れ」ハーシユはとまりました。

「この車がたがたしますよ。よござんすか。坊ちゃん」

「がたがたしたって僕ちつともこわくない」

子供が大威張りでいいました。

「そんならお乗りなさい。よおつと。そら。しつかりつかまっておいでなさい。鉄砲は前へ置いて。そら、動きますよ」ハーシユはうしろを見ながら車をそろそろ引っぱりはじめました。子供は思ったよりも車^{くるま}ががたがたするので唇^{くちびる}をまげてやつぱり少し怖いようでした。それでも一生けん命つかまっていました。ハーシユはずんずん車を引っぱりました。道がだんだんせまくなつて車の輪はたびたび道のふちの草の上を通りました。そのたびに車はがたとゆれました。子供は一生けん命車にしがみついています。道はだんだんせまくなつて真んなかだけが凹^{へこ}んで来ました。ハーシユは車をとめて子供をふりかえって見ました。

「雀^{すずめ}とつてお呉れ」子供がいいました。

「今に向こうへついたらとつてあげますよ。それとも坊ちゃんもう下りますか」ハーシユは松林の向こうの水いろ

に光る空を見ながらいいました。

「下りない」子供がしっかりつかまりながら答えました。ハーシユはまた車を引っぱりました。

ところがそのうちにハーシユはあんまり車がたがたするようになり、ふり返って見ましたら車の輪は両方下の方で集まってくさび形になっていました。

「道の真ん中が凹んでいるためだ。それにどこかこわれたな」ハーシユは思いながらとまって、しずかにかじをおろし、だまって車をしらべて見ましたら、車輪のくさびが一本ぬけていました。

「坊ちゃん、もうおりて下さい。車がこわれたんですよ。あぶないですから」

「いやだよ」

「仕方ないな」ハーシユはつぶやきながらあたりを見まわしました。たしかに構わないで置けば、車輪はすっかり抜けてしまうのでした。

「坊ちゃん、では少し待っていて下さいね。いま繩なわをさがしますから」ハーシユはすぐ前の左の方に入って行く小さな道を見付けていました。そしてその道は向こうの林のかげの一軒の百姓家へ入るらしいのでした。ハーシユはその道を急いで行きました。麦のはげがずうとかがかってその向こうに小さな赤い屋根の家と、井戸と柳の木とが明る

く日光に照っているのを見ました。

ハーシユはその麦はげの下に一本の繩が落ちていたのを見ました。ハーシユは屈かがんで拾おうとしましたら、いきなりうしろから高い女の声がありました。

「何する、持って行くな、ひとのもの」ハーシユはびっくりしてふり返って見ましたら、顔の赤いせいの高い百姓のおかみさんでした。ハーシユはどぎまぎしていいました。

「車がこわれましてね。あとで何かお礼をしますからどうかゆずってやって下さい」

「いけない。ひとが一生けん命な縛なったものをだまって持つて行く。町の者はみんなこうだ」

ハーシユはしよげて繩をそこに置いて車の方に戻りました。百姓のおかみさんはあとでまだぶつぶついついていました。

「あの繩なわ縛なうのに一時間かかったんだ。仕方ない。怒るのはもつともだ」ハーシユは眼めをつぶってそう思いました。

「あ、くさびは何処どこかに落ちてるな。さがせばいいんだ」ハーシユは車のとこに戻って、それから、また来た方を戻ってくさびをたずねました。

「早くおいでよ」子供が足を長くして車の上に座りながらいいました。くさびはすぐ大ばこの中に落ちていました。

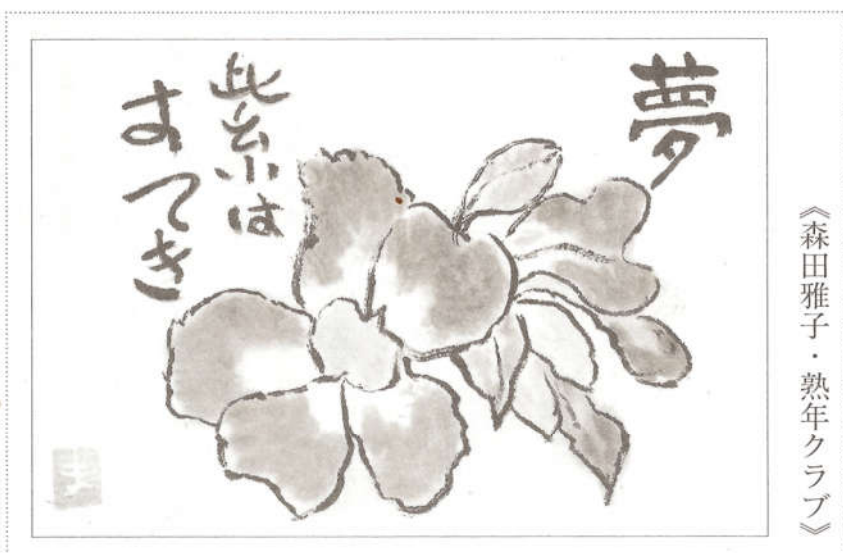
「あ、あった。何でもない」ハーシユはくさびを車輪には

めようとしました。

「まだはめない方がいいよ。すぐ川があるから」
子供がいました。ハーシユは笑いながらくさびをはめて、
油で黒くなった手を草になすりきました。

「さあ行きますよ」

《森田雅子・熟年クラブ》



車がまた動きま
した。ところが子
供のいったように
すぐ小さな川が
あつたのです。二
本の松木が橋に
なっていました。
ははあ、この子
供がくさびをはめ
ない方がいいと
いったのは、車輪
が下で寄さつてこ
の橋を通れるとい
ふのだな、ハー
シユはひとりで考
えて笑いました。
水は二寸ぐらい

しかありませんでしたから、ハーシユは車を引いて川をわたりました。砂利ががりがいい、子供はいよいよ一生けん命にしがみついています。

そして松林のはずれに小さなテレピン油の工場が見えて来ました。松やにの匂がしーんとして青い煙はあがり日光はさんさんと降っていました。その戸口にハーシユは車をとめて叫びました。

「兵営からテレピン油を取りに来ました」

技師長兼職工が笑って顔を出しました。

「済みません。いまお届けしようと思つていましたが手があきませんでね」

「い、え、私はただ頼まれて来たんです」

「そうですか。すぐあげます。おい、どこへ行ったんだ」

技師長は子供にいました。

「どうも車が遅くてね」

「それはいかな」技師長がわらいました。ハーシユもわらいました。ほんとうに面白かった、こんなに遊びながら仕事になるんなら、今日午前中仕事がなくて、いやな気がしたのうめ合せにはたくさんだとハーシユは思いました。